

私にとっての「社会マネジメント」

吉 田 節 治

私の研究領域が数学で、なかでも常微分方程式という計算主体の技巧的な分野であるため、研究に直結した内容を学生に教えることはない。しかし、数学的思考法は社会においても有用であると考え、担当している授業では学生にそれが伝わるよう心がけている。数学の面白さは、言葉を定義した上で自明の理と思われることのみ（公理）を仮定し、論理的な演繹を通して意外と思える結果（定理）を導き出す点にある。疑いようのない当然と思える事実からスタートしているだけに、導かれる結果に飛躍があればあるほど、そのギャップに驚き、気付きにくい論証を見て感心、感動する。ちょうど推理小説の謎解きのように、確実な証拠を一つずつ積み上げながら、犯罪を解き明かす面白さがある。嘘の証言や犯行のアリバイ工作があっても、名探偵はそれを直観的に見抜き、犯行のトリックを調査と名推理とで見破る。状況は異なるが、現代社会においても同様の捉え方はできる。テレビやインターネットなどの溢れる情報には、噂話やデマも多数含まれているが、多くの情報の中から真実のみを判別し、真実を根拠にして論理的に将来を見通して行くことが求められる。誤った情報を正しいと思い込めば、未来の予測を正しく行うことは難しい。人と話すなかで、不確かな情報に基づいて持論を展開する人や二、三の事例だけで一般論を語る人が多いことに気付く。また、論理的な誤りに気付かず「逆は真なり」流の命題を話している人も多い。数学的思考法に慣れてくると、誤りをすぐには指摘できないまでも、論理矛盾のあるときには「何かがおかしい」と勘づくようになる。真剣に考えることは労力を要する行為であるため、直感に頼ろうとする人が多いが、考えることを意識的に心がけておくと誤りを犯し難くなる。また、推理ができるようになるとパズルを解いたときのような爽快感も感じられ楽しい。

さて、『わたしにとっての「社会マネジメント」』というテーマだが、私は戦に就くまでの間、大学院生、研究員という立場で数学の世界にどっぷりと浸っていた。社会とは縁のない世界で過ごし、そのことに満足感も得ていた。しかし大学に勤める職を得て、教育者として学生と接し、数学者以外の人と話す機会が増えてから、世間という現実の社会を知った。一度証明された定理が未来永劫変わらずに成立する数学の世界とは違って、現実社会はあまりにも複雑であり、変化に満ちている。そもそも社会を構成する人という生きものが、周りに影響を受けて自分の考えを変え、日々変化に富んだ行動をするのだから、その人たちにより構成される社会が捉え難いのも当然で、社会に数学のような普遍則を見つけることが難しいのだろう。社会そのものの研究は社会学者に任せるとして、世間一般の私には「社会は矛盾を含んでいる」という命題を公理のように捉え、そこから考え始める方が理解しやすい。

現実的に考えれば、矛盾を含んだ社会を自分にとって快適な、より住みやすい世界にするにはどうすればよいか、その問いかけに応える学問、それが社会マネジメント学であると理解できる。次のような実験を見たことがある。実験に登場するのは、動きを感知するセンサーを持ったロボットで、動いている物を見つければそれを追いかけるようにプログラムされたマウス型ロボットである。センサー、車輪、モーターなどすべて同じ材質を用い、同じ製造方法で作る。目に当たるセンサーを持ち、動くものを追いかけることしかない単純なロボットである。それを5、6個用意する。人の目から見てそれらのマウス型ロボットは見分けが付かない。ある区切られた2メートル四方程度のリング内にランダムに配置し起動させると、マウスは他のマウスの動きを感知し、それを目指して追いかけるようになる。しばらくすると、先頭を走るマウスとその後を追いかけるマウスの列ができる。この実験を何度か繰り返すのだが、不思議なことにいつも同じように、マウスをどこに配置したかは関係がなく、先頭を走るマウスはいつも先頭であることが多く、追従型マウスもまた追いかける側に回るといふ。同じ製造方法で作ったとしても部品ごとの性能に多少のばらつきがあるため、このような結果になるのだろうが、人の社会を象徴する例示のような気がしてならない。ほとんど同じ遺伝子を持ち、同じように生まれた人間であっても、ごくわずかの遺伝子情報の違いが個人差を生む。何かに向かって進むとき、その個人差は、先頭を行く者と追いかける者とを区別する。特別に作られたスーパーマウスがいれば、他の平凡なマウスはいつもそれを追いかけるように、人の世界にも突然変異的に生まれたスーパーリーダーシップを持った人がいれば、他の人たちもリーダーを頼りについて行くだろう。あるいは、現代社会に生きる人たちが正しい目を持ち合わせていな

ければ、スーパーリーダーシップを持った独裁者に追従して、社会を過去の過ちのあったような世界にしてしまうかもしれない。その意味では、リーダーシップを人に求めるような他力本願ではなく、社会がどういう方向に向かうかを、平凡だが個性溢れる人たちが協調して、模索にかからねばならない時代になっているのではないかと思える。住みやすい社会が何であるかは、時代や社会の構成員によっても変わるだろう。グローバルでユニバーサルかつ時代に依存しないような理想的な欲張りすぎの社会は望めない。一人ひとりの個性を尊重し、各人の役割分担を適切にコーディネートし、スケジュールを立て、仲間と協働して目標に向かって進んで行く、その結果、自分を取りまく小さな世界をほんの少しでも住みやすい世界に変えていくこと。そのお膳立てと実行を何とかやり遂げる（manage）責務を社会マネジメント学は担っているのだろう。